

辺見 庸さん 最も弱いものを基盤に書く



新刊小説「月」(KADOKAWA)は、2年前に起きた障害者殺傷事件に着想した。当時すぐ「これは世界史的な事件だ」と直感したという。「18世紀以降、つまり近代が奉じてきた人権や平等といった理念が崩壊しつつあるさまを、ぎらっと見せられたと思った」からだ。

読者をあっと驚かすのは叙述の方法だろう。主要な語り手は病床に横たわったまま見えず聞こえず動けず、医学的には「思っこと」もないとされる人物。にもかかわらず自由に想念を飛ばし、見えるはずのない光景を目撃し、意識の“割れ”なる分身まで登場する。彼(彼女)の目に映る幻想は作品の大きな魅力だ。

「実のところ事件をなぞる気は全くなくて、オントロジー、形而上学的に言えば存在論を小説の形で問い直したかった」と意図を明かす。人間とは何か、在るとは何か、無いとは何か。「無いこと」には負の価値しかないのか……。執筆の間、そう問い続けることを心の内で支えた人がごく近い所にいた。「病気で倒れ、遷延性の昏睡状態こんすいで寝たきりになった。だが彼は本当に夢を見ないのか、何も思わないのか。彼の側から周辺を見ようとする

することで書く力をもらった」

それはかねて抱いていた問題意識とも重なる。「いつの頃からか、書くことの基盤に最も弱いもの、明日にも消えゆくもの、排除されてもよいと思われているものを置くことと思ってきた。近年はその思いがますます強固になっている」。世の中が強者の論理で覆われ、弱い者が自己責任と切り捨てられ、排外主義が大手を振る現在への「反動でもある」。次作には「老人のテロリストの物語」を構想中だ。どんな言葉を武器に世界を撃つか。